

このコンクール、ショパン好きには見逃せない!

第4回ノアンフェスティバルショパンインジャパン ピアノコンクール2023レポート

予選（動画審査）2022年9月1日（木）～2022年12月17日（土）

予選審査員 イヴ・アンリ

予選結果発表 2023年1月21日（土）
アンリ教授より申込者全員に講評を送付

本選日程 2023年4月28日（金）～30日（日）
本選出場46名 公開コンサート形式

会場 ベヒシュタイン・セントラム 東京 ザール
本選はYouTubeライブ配信も実施

本選審査員 イヴ・アンリ 村上 弦一郎 川口 成彦

「ノアンフェスティバル ショパン イン ジャパン ピアノコンクール」はベヒシュタイン・ジャパン招聘ピアニストであるイヴ・アンリ氏が主宰するノアンフェスティバル ショパン イン フランスでの招待ピアニスト、関連する行事での招待受講生を選考するコンクールです。

参加対象は5歳から年齢制限無し、部門はピアノ演奏家（A部門）、一般（B部門）の2つからなり、予選はアンリ教授による動画審査、本選はベヒシュタイン・セントラム 東京 ザールにて公開コンサート形式で、A部門は3～40分、B部門は10～15分、一人一人個性的で唯一無二のショパンが奏でられます。参加者の出場理由としてショパン、ベヒシュタインが好き、審査員や賞が魅力的で参加した等、年々注目度が高まっています。



ノアン賞受賞の仁宮花歌さん



ショパン・ナイト受賞賞の神宮司 悠翔さん



ショパン・ナイト受賞賞の田中 理恵さん



審査員と受賞者の皆様と

審査結果

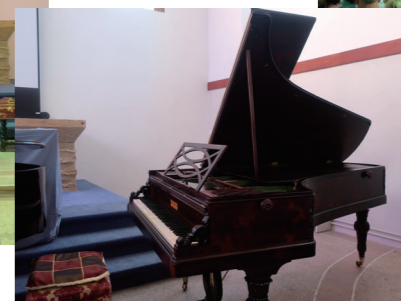
部門賞		
A1部門	A2部門	A3部門
1位 仁宮 花歌	1位 岩井 亜咲	1位 田中 理恵
2位 神宮司 悠翔	2位 今井 菜名子	2位 梨本 卓幹
稲田 つづる	3位 財満 桃響	3位 飯島 聡史
B1部門	B2部門	B4部門
1位 岡田 怜大	1位 進藤 未紗	1位 小川 巧真
2位 荒木 萌々子	2位 増岡 慶	2位 中田 征希
3位 丹治 穂菜美	3位 池田 宏樹	3位 新田見 宏美
特別賞	A1部門 仁宮 花歌	
ノアン賞 2024年7月派遣予定	A1部門 神宮司 悠翔 A3部門 田中 理恵	
ショパン・ナイト賞 2024年10月派遣予定	B4部門 黒田 ゆか 納富 美佐	
パスポート賞	A3部門 坂川 映子	
ベヒシュタイン・サロン賞	B1部門 岡田 怜大 B2部門 進藤 未紗	
	A2部門 岩井 亜咲	
	A3部門 重森 忍 梨本 卓幹	

「ノアンフェスティバルショパンは、フランスで最も古くから始まった音楽祭の一つ。大ピアニストのチャコリニによって、1966年に創設されたこのフェスティバルは他に例を見ない音楽祭です。ノアンはショパンが1839年から1846年まで毎夏の数ヶ月間滞在し、傑作の大部分を作曲したフランスの中央部、ジョルジュ・サンドの領地で開催されるからです。世界中のピアニストにとってこのフェスティバルでショパンを演奏することは、夢の一つでしょう。」と会長であるアンリ氏よりメッセージを頂きました。

第3回ノアンコンクール2021ノアン賞受賞の永倉菜弥さんがマスタークラス受講、
第4回ノアンコンクール2023パスポート賞受賞の黒田ゆかさんがフェスティバル聴講参加しました。

マスタークラス

今年は教会を会場に、モダンピアノとショパン時代のフォルテピアノを使用して、7/21,22,24,25に開催されました。毎回100名程の聴衆が熱心に耳を傾けました。



マスタークラス修了コンサート

7/26マスタークラスの総まとめとして、コンサートが開かれました。アンコールでは3人による6手連弾も。閉幕にはノアン・ベリー地方の民族楽器楽団も駆けつけ大盛況の中、終演しました。



ベリー地方の楽団の方々



ジョアナ・ゴランコさん 会長 イヴ・アンリ氏

永倉 菜弥さん 福田 優花さん



永倉さん演奏



アンコール

フェスティバルをサポートした方々



ベルリン・ベヒシュタイン社 調律師のアンズさん



コンサートやマスタークラスで使用した1844年製ブレイエル、ピアノ調律を担当されたオリヴィエさん



イ・ヒョク



TRIO METRAL

著名な演奏家達



オレイニチャク



リュビモフ

第5回ノアンコンクール予選は2024年12月中旬締切、
本選は2025年4月25日～27日開催予定。
お問合せは competition@bechstein.co.jp まで



ノアン賞、パスポート賞受賞者による 第57回ノアンフェスティバルショパン 2023 レポート

ノアン賞受賞 マスタークラス参加
(第3回コンクール A1 部門 第1位)

永倉 茉弥さん

パスポート賞受賞 フェスティバル聴講参加
(第4回コンクール B4 部門 出場)

黒田 ゆかさん

これまでショパンを取り巻く数々の回想録や手紙、時には本の挿絵にまで見たノアンの風景は、今もショパンとサンドが過ごした時の趣をそのままに残しているようでした。果てしなく広がる穏やかな田園風景に、クリーム色の外壁が素朴な家屋や教会は、どれもどこか控え目で、肌を感じる柔らかい空気に当時ショパンが触れた感覚に思いを馳せる毎日でした。

フェスティバルの全ての催しが行われた、ショパンとサンドが過ごした館とそこに隣接した羊小屋ホールは、当時の楽器だけでなく生活に使われた食器や家具がそのまま残されており、建物のあたり一面を開く庭には優しい色合いの花々が咲き香っています。この美しい庭を歩いていると、ショパンがここで一時の夏を数々の文化人たちとともに過ごし、多数の名作を生み出したという、それまでモノクロームに感じられた史実がふいに色鮮やかに想像され、確かなこととして迫ってくるようでした。

特にこの特別な庭で行われたコンサートは思い出深く、IMPROMPTU LITTÉRAIRE ET MUSICAL と名付けられた、2人のフランス人俳優による朗読(ジョルジュ・サンドとコレットの作品)と、その合間に私たち受講生の演奏によるショパンの音楽を添えた、文学と音楽を融合させたプログラムでした。音楽は役者の語る言葉の語感に誘われるように、言葉は音楽の響きの中で呼吸を合わせるように抑揚をつけていく、まさに文学と音楽の即興劇のようで、音と言葉が美しく調和していくのを胸をときめかせながら感じていました。

プレイエルを使ったイヴ・アンリ教授による連日のレッスンはもちろんのこと、毎晩のように素晴らしい音楽家の演奏に触れ、合間に聴衆の皆さまと楽しんだ食事や散歩、会話の全ての瞬間が、ショパンの当時の生活を想起させるものでした。

ノアンで過ごした夢のような時間を言い表すにはとても言葉が足りませんが、ふと本の中に見つけた、画家ドラクロワが初めてノアンを訪れた時の手紙の一文が、まさにノアンで過ごした日々との趣と重なるような気がして何度も思い返しています。

「時おり、空いた窓から庭にショパンの音楽の調べが聞こえてきます。ナイチンゲールの声と薔薇の香りを合わせたような調べが。」(ジム・サムスン著 大久保賢訳「ショパン 孤高の創造者」より)

またいつか、ノアンの地へ再び戻れることを願って。



〈ノアンフェスティバルショパン〉は、かの有名なアルド・チッコリーニによって創設されたフランスでも由緒あるフェスティバルの一つ。7月の最後の1週間が最大の山場となり、私が受賞した〈パスポート賞〉はこの最終週に連日行なわれるリサイタル、イヴ・アンリ教授によるマスタークラスレッスン他様々な講演会に出席できる通し券を頂けるといった内容。毎晩リュビモフ、オレイニチャクはじめ素晴らしいコンサートの数々。そしてマスタークラスレッスン会場にはシニア夫妻から若い音楽家の人たちがこの本格的なマスタークラスを熱心に聴き入り、専門家からたくさんアマチュア層までを相手に巧みな話術で皆を巻き込んでゆくイヴ・アンリ先生は、本当にインテリジェント。ポーランドからの Joanna Goranko さん。素敵に洗練された技術と音色をお持ちで、プレイエルピアノから Amerigo Olivier Fadini 氏制作の1844年製プレイエルで弾くと、世界が変わるよう。今秋ワルシャワの第2回ショパン国際ピリオド楽器コンクールにもエントリーしている方ですね。続く永倉茉弥さんも素晴らしいエチュードの数々を聴かせてくれましたし、ジョルジュ・サンドの館でのピアノノを使った受講生コンサートでは、パリから参加されていた福田優花さんの音色もガラリと変わった気がしました。

それにしてもレベルの高いマスタークラス、私は渡仏直前まで東京で「フォルテピアノアカデミー SACLAY」に参加していて一旦は凹みかけていたのですが、今回のノアンでのマスタークラスは先を行く自分の姿を見ているようなデジャヴならぬデジャエクトの感覚に持っていられるよう。洗練されたテクニックと落ちついた耳が聴けたこと、幸せに思います。この卓越した受講生の方々のピアノを聴き、今の自分にまた努力さえすれば先に近づける可能性があることを自覚させてくれるお手本を聴かせていただいたような、そしてノアンに呼ばれて来たような、そんな気さえたものです。

私は5年前にワルシャワで第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールを現地で聴き、予選会場でステージ上にあった選りすぐりのプレイエル、エラール、ブロードウッドの3台を試弾させていただくという稀有な機会に恵まれ、その時思った「何とモダンピアノは誤魔化しの効く楽器なんだろう！」という印象に基づき、最近小倉貴久子先生、川口成彦両先生にヴァルターやプレイエルをレッスンしていただくようになったのですが、ノアンではヨーロッパの石建築の中で見聞きする全てが勉強となり、それまで受けてきたフォルテピアノレッスンでの知識が数珠のように繋がってゆくようでした。それにイヴ・アンリ先生のレッスンは日本でも何度も聞いていますしレッスン内でお話している内容は大きくは変わらないのですが、マスターコースレッスンが行なわれたのはノアン市内の素晴らしい教会の中。天井も高く、全てが石建築の中で反射される音響空間の中で聴くアンリ先生のピアノの音はより美しく、倍音がより聴き取りやすいこの空間の中ではアンリ先生の解説もよくわかるというものです。そして街の中に響く教会の鐘の音、鳥のさえずり、行き交う人々のフランス語会話、こうした音が石畳の空間に映え、ノアンでの滞在が私の耳を豊かにしてくれました。とても実り多きノアンでの研修でした。皆様に感謝の思いです。ありがとうございました。



ノアンフェスティバルショパンインフランス会長イヴ・アンリ氏インタビュー



ベヒシュタイン・ジャパンではノアン フェスティバル ショパン イン フランス会長であるイヴ・アンリ氏と2016年からノアンフェスティバル ショパン イン ジャパンピアノコンクールを開催しています。また、ベルリン・ベヒシュタイン社はノアンフェスティバル ショパン イン フランスとパートナーシップの関係にあり、2016年からコンサート会場にベヒシュタインを貸し出しています。今回、ノアンフェスティバル ショパン会長のアンリ氏へフェスティバル、マスタークラス、コンサートについて色々お聴きしました。 2023年7月25日 マスタークラス会場の教会にて

質問: アンリ氏のマスタークラスは受講生には勿論、特に聴講生へショパンの音楽をわかりやすく、語りかけているようで印象的でしたが、何か特別に意識をされていますか。日本でもこのようにできるでしょうか。

アンリ氏: フランスのノアンフェスティバルに来られる聴講生は音楽を専門に知らない方も多ですが、彼らは聴く耳を持っています。サウンドと音楽についてのお話を伝えるようにしています。日本でのマスタークラスでそのように聴衆によく分かってもらうのには、優れた通訳者が必要だと思います。

質問: マスタークラスでショパン時代の古いプレイエルと新しいプレイエルピアノの2台を使って行う意義を教えてください。

アンリ氏: 2台の時代の異なるピアノはそれぞれサウンドが異なり、ペダルの使用感や残響も異なり、ショパン時代から現代にかけて多くのことが変化しました。ショパン時代の古いピアノで、ショパンの書いた通りのペダルを踏み、それを思い返し現代のピアノへ移行し弾くことは可能かと思えます。しかし古いピアノの経験がなく、現代のピアノでショパンの指示通りのペダルを踏むと、時にはうまくいかないこともあり、「この楽譜の指示はよくない」と思うこともあるでしょう。ですから古い時代のピアノのペダルやサウンドがこうだったと知って、現代のピアノにこの知識を合わせていくことはとても大事なのではないのでしょうか。古いピアノはペダルを踏んで切った後も響きが残る、モダンピアノはそれに比べて音の響きは短く切れます。こういった違いがあるものの、同じアイデアで現代のピアノと対峙していくことはとても大事だと思います。

質問: 現代のピアノと古いピアノとでは音量に差があり、マスタークラスやコンサートで各々聴いた時に違いを感じましたが、アンリ氏はどのように思われますか。

アンリ氏: 古いプレイエルの楽器はサロンの大きさにはちょうどよく、コンサートホールでは設置場所としては大きすぎたかもしれません。しかし数秒間聴いていたら耳が慣れて美しい音だと認識します。こういう古い楽器は設置場所も大事ですね。

質問: ノアンフェスティバルとベヒシュタイン社とはパートナーシップの関係ですが、今回貸し出されたベヒシュタインのフルコンサートモデル D-282 はいかがですか？

アンリ氏: 年々楽器の改良をされ、毎回メカニックもよくなってきているのでとても楽しみです。ノアンフェスティバルで演奏する多くのピアニストがベヒシュタインを喜んで弾いているので、引き続き素晴らしい楽器提供の継続をお願いしたいです。

質問: 第57回ノアンフェスティバルのテーマが「ショパンと旅、ラフマニノフ生誕150年祭」でしたが、次回の希望、展望をお聞かせください。

アンリ氏: 来年はフォーレが生誕祭で、ショパンが亡くなった後のフランスの重要な作曲家の一人です。彼はショパン同様、ノクターン、バルカローレ、即興曲等ピアノ作品を多く残し、音色の変化も作品にもたらし、ショパンとの関係もあったので、これをテーマにしようかと考えています。



nohant
FESTIVAL
Chopin
Un romantisme nature

- 1.2.3. フェスティバルの会場である羊小屋ホールの入口、敷地内、会場前
- 4. ジョルジュ・サンドの館
- 5. // サンドの外観
- 6. コンサートで使用されたベヒシュタインフルコンサートモデルのD282
- 7. 最終日に訪れたベヒシュタイン・セントラムパリのスタッフの方

質問・翻訳：白川ひかり